

【研究ノート】

メキシコ市ミルパアルタにおける「先住民」の社会的位置
 ——2008年のフィールドワーク再考——

岸 下 卓 史

1. 問いの所在

本論の目的は、筆者が2008年に実施したメキシコ市ミルパアルタ地区におけるフィールド調査の再検討をつうじて、メキシコにおける「先住民」という社会的帰属のローカルな生成を明らかにすることにある。

メキシコでは20世紀初頭から国民国家の形成が目指され、その主体となる国民の創出が図られてきた。16世紀から連綿と続いた先住民とヨーロッパ系住民のあいだの分断を融和へと向かわせ、メキシコを近代的な産業社会にするために、主に農村部に居住し、多様な言語を話す人々、すなわち先住民を、生産者・消費者としての一定の均質性を帯びた社会集団に変貌させることが喫緊の課題とされた。この社会集団はメスティーソ、あるいは単にメキシコ人と呼ばれる。

メスティーソとは元来、スペイン語の動詞「mestizar = 交配・混血させる」の名詞形であり、生物・人種的な意味を含んでいた。それが17、18、19世紀と近年になるほど、生物・人種的というより、文化・社会階層的な意味を帯びようになっていった。メキシコにおいて先住民とヨーロッパ系住民のあいだの性的接触は比較的頻繁であり、結果的にメスティーソは増加していった。だが他方で、隔世遺伝などの理由で外見による先住民との判別がつかないことから生物・人種的な区別は徐々に無効化していったのである。

こうした状況で、スペイン語の普及、都市への移住が生じると、先住民とメスティーソを区別す

る線はますます社会関係に依存するようになる。当人がどこで、誰と、どんな活動をつうじて、どのくらいの所得を得るような関係性の中にいるのか。このことが、メスティーソ／先住民であることを決める重要な要因となった。そもそも混血した者を意味するメスティーソとは、その一部に先住民のオリジンをも含んでいる。その意味でまったく先住民でない、ということは論理上ありえない。換言すれば、メスティーソという存在自体、元々からして曖昧さを孕む。あくまでも先住民的部分を抱えながら、なおも先住民ではないという微妙な社会的な位置に成立するのが、メスティーソというアイデンティティなのである。(1) 外見上の判別が容易でないこと。そして、(2) 集団を指示する概念そのものが両義的であること。これらのことから、二つの集団の境界は、社会関係のなかで常に更新され続けると言える。

本論では、上述した現代メキシコにおける集団区分の複雑さを前提に、2008～2009年にかけて実施した当該地域におけるフィールドワークで「先住民」を見出すことで、筆者がどのように困難に直面し、失敗したのかを記述する。この時期、(今以上に)未熟だった筆者は博士論文を書く上で中核となるような問いとデータを同時に手に入れようと必死だった。そして、集団区分の複雑さへの理解が不十分なまま、地元住民を新しい先住民として類型化したのである。この点を再考することで、メキシコの民族集団を対象とする今後の研究への新たな指針としたい。

2. ミルパアルタ地域と出会う

ミルパアルタは一見すると何の変哲も無い地方都市である。筆者が2008年に訪れたとき、この地域には先住民文化が残されていると聞いていたが、暮らしぶりは基本の部分で日本のそれとほとんど変わらないと感じた。この点を（わざわざ）確認するために、ミルパアルタを概観するための指標をいくつか提示する。

当該地域の面積は240平方キロメートル弱。人口は11万5,895人（2005年）。人口密度は一平方キロメートル当たり480人程度（2005年）。主な産業はノパル、精肉、モーレである。産業分野別就業状況は、第一次産業14%、第二次産業20%、第三次産業63%である（2000年）。

2010年の統計指標で住民や世帯ごとのインフラ普及状況から見ると、下水道96%、電気98%と完全普及に近い。電化製品についても、冷蔵庫70%、洗濯機60%と比較的高い。その他の製品については、テレビ95.8%、パソコン25%である。

識字および教育については、何らかの先住民言語を話す4%を除く住民がスペイン語を使用する。教育については、小学校卒業者は92.1%、中学校卒業者は61.8%である。また、平均就学年数は9.1年である。（INEGI 2000, 2005, 2010統計、岸下2015）

以上の統計指標からミルパアルタについてどのようなイメージが浮かぶだろうか。東京都を例に取れば、多摩地域のなかでも八王子市などの位置する南多摩と比べればはるかに人口密度は低いが、西多摩の日の出町とはほぼ同程度の密度で住民が暮らしている。

地域別統計ではないが、日本における分野別の就業状況は、第一次産業5.9%、第二次産業25.9%、第三次産業67.3%である（総務省統計局2005）。

同じく、日本における下水道の人口普及率（国土交通省2017）は90.4%である。これは世帯当

たり普及率ではなく、また、下水の処理方法についても異なる。電気については1927年にすでに電灯普及率87%に達し、その後は発電量の増加とともに普及率も上昇し、現在に至る。

家電製品の普及に関しては、日本の場合、冷蔵庫98.4%、洗濯機99%、テレビ99%、パソコン65.7%である。

現代日本の教育状況については、ミルパアルタの小学校・中学校就学歴と一致した指標ではないが、中学卒業者のうち98.5%が高校に進学しているように、後期中等教育の普及率は100%に近い。

以上で、ミルパアルタと日本のほぼ同時代の指標を比較してみて、どんなことが言えるだろうか。上掲の諸指標は必ずしも同条件で比較されていない。下水処理の精度を無視している。家電であればどんな価格でどんな性能なのかが不明だ。これ以外にも、メキシコと日本のあいだにどんな違いがあり、その違いから公平な比較はどの程度困難になるかはわからない。こうした比較軸における一貫性の欠如以外に、教育水準ではふたつの社会で大きな相違を指摘できる。高校卒業がほぼ当たり前になった日本と、就学年数が9年強、つまり中学校卒業程度しかないミルパアルタ（そして、ある程度メキシコ全体）では明らかな格差がある。

ただ、こうした比較の不適切さ、教育面での相違、一部の家電（パソコン）の普及率の差といった側面を差し引いても、なおも言えることは両者の生活様式、生活と関わる環境が著しく似通っていることだ。ここは先住民「族」という言葉から想起されるような、生業、文化、科学技術、街並みといった点で私たちと大きく異なる生活が送られているような土地ではない。それどころか、これらの側面できわめて一般化した居住空間なのである。

この土地に、外見上、先スペイン期の先住民的意匠のようなものはほとんど残存していない。だからこそ、エスニシティ研究者、文化人類学者として私がこの地域に初めてやってきたとき、わざわざ「先住民」を探す羽目になったのである。

3. ミルパアルタ地域で「先住民」を探す

3-1. 中流の地元住民の家族——家族A

筆者は2008年から2009年にかけてメキシコ市ミルパアルタ地区でフィールドワークを実施した。当時、メキシコ市のコヨアカン地区にあるUNAM (Universidad Nacional Autónoma de México) に付属するCEPEでスペイン語を勉強していたが、その合間、週末に市内南東部のミルパアルタ地区までバスで通い、日帰り調査を行っていた。2009年になってからは、地元住民の家に下宿させてもらい、今度はそこからCEPEに通ってフィールドワークを続けた。

下宿先はミルパアルタでは比較的豊かな家族だった。この家族(以下、家族A)はノバル(食用サボテン)生産と羊肉業の成功で1960、1970年代に階層上昇を果たした一族のうちのひとつで、筆者が接触した時点で4~5万ペソ程度(世帯全体)を稼ぐ中流階層だった。この4~5万ペソという月収は市中心部でもかなりいい方で、中の上の社会階層に相当する。この地域には行政区首長を輩出し、ノバル生産業や精肉業で傑出したシェアを持つ名高い家族がいくつかいたが、家族Aはこれに準じる位置にあった。家族Aの家長ビセンテの父が羊肉業で財をなし、ビジャ・ミルパアルタ(ミルパアルタ地区の区庁舎所在地)各地に大きな家を建てた。そのうちのひとつに、家族Aは暮らしていた。

二階建てで、一階と二階にそれぞれ広いリビング、二階にビセンテの部屋、長女の部屋、長男の部屋、そして私が入るまで妻が使っていた部屋があり、上下階合わせて400平方メートルほどの広さがあった。家族構成はビセンテ、妻、長女、長男の4人である。家族Aは番犬として黒い大きな犬を二匹(「ライオン」、「ジャガー」)飼っていた。メキシコで一度大きな犬に噛まれたが、その二匹には不思議と吠えられることもなかった。長女と長男が私を「敵じゃない」と二匹にきちんと伝えてくれたためだろう。私はそこで寝泊まりし、勉

強し、学校に通い、帰宅するとそこからミルパアルタの調査に出かけていった。ビセンテは羊肉の解体と販売に従事し、妻は街中心部にある常設市場の軽食堂を切り盛りしていた。長女は母親と一緒に軽食堂で働き、長男は高校に通う傍ら、軽食堂で時々仕事を手伝っていた。長女はiPod Classicを所持し、長男はいつもレディーガガの“Poker Face”を口ずさんでいた。ちなみに、日本でレディーガガがこの“Poker Face”で知られるようになったのは、私が帰国した2009年の半ばくらいからだ。ビセンテが家にいることは少なく、私は妻、長女、長男と一緒に過ごすことが多かった。3人から、あいさつなど初歩的なナワトル語、「マラカチテベック・モモシュコ」という昔の地名、革命の英雄エミリアーノ・サパタ、そして当時影響力のあったEZLNについて話をきいた。また、チャルマ巡礼の手はずを整えてもらったり、グアダルルーベ寺院に家族全員と一緒に訪ねたりと、ミルパアルタやメキシコの過去に触れる貴重な機会をつくってもらった。

当初、ミルパアルタで、中流以上の所得、広い家、恐ろしげな番犬、垢抜けた子どもたちというそれ以前に学んだ保守的な「先住民」イメージとは異なる環境で、この土地とメキシコの歴史について教わるというアンバランスな時間を過ごした。

3-2. 貧しい移住者の家族——家族B

そんな刺激に満ちながら私にどこか違和感を覚えさせた生活を変えたのは、この家で家政婦として働いていた中年女性、イネスとの出会いだった。イネスは、毎週平日に、朝9時ごろ家族Aの家までやってきて、料理、洗濯、掃除をやって、午後5時ごろに帰っていった。

彼女はオアハカ州出身で、サポテコ人が出自だった。9歳で初めて彼女は父親と一緒にクアウテモック行政区にやってきた。ほとんど教育を受けていなかった彼女たちにできる仕事は、家政婦やその他の肉体労働など限られていた。そこで彼女は子守りとして働き、少しずつスペイン語と都

市生活に順応していった。12歳になって彼女は父と一緒にミルパアルタに引っ越す。当初、住み込みの家政婦としてある家族の元で働き、その後ビセンテの父の家にやってきた。息子のビセンテの代になっても通いの家政婦として彼の家で働いている。彼女には2人の息子と2人の娘がいる。長女と次女はすでに嫁いでいた。彼女はときどき次男を連れて、ビセンテの家にやってきた。そのとき私は彼女たちと話し、少しずつ受け入れてもらい、彼女の自宅を訪ねることになった。

彼女の家は、ノバル畑の真只中にあった。隣村まで斜面をバスで上がり、バス停から10分ほど歩く。すると、それまで続いていた幅の狭い舗装道路が途切れ、周囲はノバル畑だらけになる。畑は道路よりも低い眼下の窪地に広がっている。窪地に下りて、縦列状に植えられたノバルのあいだを縫って歩いていくと、トタン製の彼女の家があった。建材などは全く使われていない。トタン、不揃いの木材、人間の頭ほどの大きさの石、ビニールシートなどを組み合わせた手製の住居だった。敷地には、小さなニワトリ小屋、ガスタンク、飲料水のタンク、汲み取り式のトイレがある。8畳ほどの土間の奥にベッドが三つコの字状に並べられ、入り口付近は七輪や食器棚などが置かれたキッチンスペースになっていた。キッチンの隅にはテレビが置かれ、電源は近くを通る電線から屋内までケーブルを、おそらく無断で引いていた。

最初、私がこの部屋に来たとき、あまりの粗末さと不衛生さに驚いた。そして、彼女たちはどれほど貧しいのかと心配になった。この最初の訪問以後、ときどき彼女の家を訪れて、子どもたちにインタビューした。彼女がいるときは食事をご馳走になった。そして、私はほかの家族にはほとんどしなかった食材の差し入れを頻繁にやった。息子たちは、ときどき、「こんな汚い家に来て引いてるんだよ」、「こんな汚いところで食欲なんてわかないんじゃない?」といった私の心を見透かしているかのようなことを言った。だが、イネスはその度に、「そんなこと言うんじゃない、

「黙って食べなさい」と2人をたしなめ、調査を続けさせてくれた。

先住民共同体に生まれ、メキシコ市への移住後はずっと雇用市場で未熟練労働に分類される仕事に従事し、歳をとると下宿先を追い出され、結婚相手のいない息子たちと粗末な家で暮らす。訪れるだけでも気が滅入るような居住環境で暮らしているイネスの家族のことを想うと心が痛んだ。

私はビセンテの家族をつうじて「中流先住民」の家族を(勝手に)思い浮かべ、イネスの家族をつうじて「下層先住民」をイメージしていた。両者は階層上、両極端に位置づけられる事例だった。とはいえこの両者から、現代メキシコの貧困と格差について考えるのはあまりにも単純だ。こうしたタイミングで注目したのが、当時並行して関わっていたブランカの家族だった。

3-3. 働き者の母と教育達成を目指す娘 ——家族C

ビセンテの家で下宿していたころ、ときどき買い物に立ち寄った食料雑貨店で働いていたのが、ブランカだった。当時、日曜日を除く週5日間、毎朝9時から夕方5時まで彼女はその小さな商店で働いていた。明るくはきはきとした接客で、鶏肉、牛肉、ハム、卵などのたんぱく源となる食品、パスタ、米、小麦粉、トルティージャなど炭水化物系の食品、トマト、玉葱、生とうがらし、かぼちゃ、ジャガイモ、にんじんといった野菜類、そしてビスケットや炭酸ジュースなどの加工品というようにあらゆるものを売っていた。そんな彼女の魅力に惹かれてか、私はそのうちその店に長居しながら、いろいろと話を聞くようになった。

先住民の出自を持つ人物にインタビューをしたと伝えると、彼女は様々な人物との仲介役になってくれた。彼女の紹介でインタビューできた人物のうちの一人が彼女の母で、ケタロ州のオトミーを出自とするエリカだった。エリカとその娘であるブランカ、そしてブランカの姉妹たちは、以前、グスターボ・A・マデーロ行政区に住んで

いたが、2002年にミルパアルタにやってきた。当初はパン屋（「ココル」の製造・販売店）で、調査時点ではトルティージャ店で働き、娘たちを養っていた。エリカは前夫でブランカたちにとって実父にあたる男性とはこの地に来る前に何らかの事情で別れ、2009年時点ではミルパアルタ出身の別の男性と事実婚状態だった。そして、その男性とのあいだに男の子を一人（ブランカたちにとっての異父弟）産んだ。エリカやブランカたちは店から300メートルほど離れた借家で暮らしていた。ビジャ・ミルパアルタの中心部にある、月極1,000ペソほど、2間から成る住居だった。

私が昼過ぎにブランカを訪ね、接客がてらの彼女と話していると、大抵、午後3時を過ぎたくらいから姉、妹、弟などが一人ずつ集まってきて、彼女たちも交えて店で働くブランカと話す状況になった。ブランカには二人の姉がいるが、そのうちの一人は市内の別の地区に住んでいて会ったことはない。もう一人の姉も別の地区に住んでいたが、しょっちゅうブランカのところにやってきた。妹と弟は学校を終えるとすぐに店にやって来て、たむろしていた。夕方5時を過ぎると、母親が継父と一緒にやってきて6時ごろには店じまいをして帰っていった。

商店に通い、ブランカとその家族と接して私が強く感じたのは、同じ家族でもそれぞれ異なる性格を持つということだ。二人の姉は高校を終えてすぐ地区外に出ていき、そこで働いていた。妹、弟も熱心に勉強して大学に進学するようなタイプには見えなかった。他方で、ブランカは当時から将来のUNAMの進学試験に備えて、学習塾に通うための資金を貯めていた。そして、2011年時点で実際に学習塾に通い、2013年に連絡を取ると、彼女は無事UNAMに進学し、勉強していた。このことを後に知って、私は驚いた。彼女がUNAMに進学するなんて…。というのも、メキシコで、そしてミルパアルタにおいて、先住民の出自を持つ両親に育てられた子弟が大学に進学することはごく稀だからだ。2節で言及した通り、

ミルパアルタでは平均就学年数に照らせば中学校卒業が一般的である。こうした教育事情を抱える地域で、中流の地元住民のあいだでも難しいとされる大学進学を、彼女は成し遂げたのである。

3節でこれまで記述してきたことをまとめよう。私は、ビセンテの家で意外に豊かで、保守的な先住民イメージから外れた「先住民」の家族と出会った。次に、イネスの家族と知り合ってサポテコの出自を抱えてメキシコ市に移住したときどれほど貧しい暮らしに辿り着くのかと気づいた。そして、一見してイネスとほとんど変わらない出自の子どもでありながらおそらくは中流へと階層移動を果たすブランカという特殊事例に出会った。つまり、階層上はほとんど先住民の出自から外れた家族A、階層と先住民的出自がほぼイコールの家族B、階層と先住民的出自がほぼイコールでありながらそこから抜け出る可能性を示す家族Cの娘という三つのモデルケースから、先住民と階層のあいだの関係を捉え直すことが可能なのではないか、という考えが浮かんだのである。

4. ミルパアルタ地域の過去を調べる

4-1. ミルパアルタの歴史

3節で取り上げたのは階層という「先住民」の可変的な側面であった。「先住民」には変わりうるものとしての個別的な側面もある。各個人がどのような経済的境遇にあるか、どのような水準の教育を受けているのか、その結果としてどのような社会関係を周囲と取り結ぶのかに応じて、各個人は自らの出自との関わりを試行錯誤していく。これは個々人の事情に応じて、先住民的帰属が動態化するということである。

他方で、「先住民」には変わりえないもの、あるいは少なくとも変わりにくいものとしての側面もある。それは歴史であり、過去であり、それをめぐる人々の記憶である。これは社会において構造としての役割を果たし、人々のあいだに膾炙し、文献やその他の文字資料をつうじて記録される。

また、逆に、人々がそれでもって社会を再構成していくリソースでもある。

この歴史については、ミルパアルタの場合、それほど精確なかたちで残されているわけではない。メキシコの他地域の例に漏れず、ミルパアルタでも歴史は植民地期以降、修道士や司祭によって記録され、今日まで過去を伝えている。先スペイン期に文字が発明されなかったため、先スペイン期の社会や文化の詳細は、当時の住民から司祭たちが聞き取り、書き記した。実は、カトリックの神父たちが書き残したミルパアルタについての記録にはそれほど古いものはない。16世紀、17世紀という比較的先住民社会が残存したとされる時代についての歴史学に裏付けられた史料は決して豊富ではない。

植民地時代末期、1776年のものとされる、「当該教区アスンシオン教会およびミルパアルタ村落の教区民名簿」という名の当時のミルパアルタについての統計資料が存在する。この統計に従えば、18世紀末の時点で、すでに現在のミルパアルタの原型が存在していたことを確認できる。まず、ビジャ・ミルパアルタを含む5つの村落に、3,335人の教区民が暮っていた。教区教会が置かれていた当時のビジャ・ミルパアルタには、当時存在していた他の村落全体に匹敵し、教区人口のうちの半数弱の、1,521人もの人々が集住していた。この人口に、サンペドロ村落の885人、サンパブロ村落の367人、サンロレンソ村落の284人、サンフランシスコ村落の278人が続く。

当資料は次の2つの重要な事実を指し示す。1点目は、当時すでに、ミルパアルタのみならず、サンペドロ、サンパブロ、サンロレンソ、サンフランシスコといった村落名が冠された人口の集住地が存在していたという事実である。さらに、ビジャ・ミルパアルタの場合、今日では見られない居住区名に加えて、サンタマルタ、サンタクルス、ラ・コンセプションといった現存するバリオと同名の街区が設置されていた。これは、200年以上も昔に既に今日のミルパアルタの原型が人の生活

空間として確立していた事実を如実に物語っている。2点目として、名簿に記載されているおそらく名字と思われる名前の大部分が、今日のようなマルティネスやゴメスといったスペイン様式の名ではなく、先住民言語に基づいている事実を指摘できる。例えば、ラ・コンセプション通りには、トラソパム (Tlaxopam)、ハルテンコ (Xaltenco)、ハラン (Xalan)、ロメロ (Romero)、トラヒマコ (Tlaximaco)、トラルテペック (Tlaltepēc)、ソチマンカ (Xochimanca) という世帯が位置していたが、このうちロメロのみがスペイン語式で、残りすべての名字がナワトル語式だった。(Pérez Zevallos 2012: 80-82, 岸下 2015: 76)

4-2. 郷土史の創作

以上が歴史学的な裏付けのあるミルパアルタの過去であるが、実は歴史学的に裏付けられていない過去も存在する。革命の傷跡が徐々に癒え、村が近代化し始めていた1939年8月15日。その日に開催された第1回ミルパアルタ地域祭で、ミルパアルタの郷土史家フィデンシオ・ビジャヌエバが配布したパンフレットに書かれていた歴史である。以下に概要を記す。

ミルパアルタには、特に、原村落住民たちを中心に広く認知されている郷土史が存在する。この郷土史の内容は、その土地がスペイン人によってミルパアルタと名づけられる以前、先スペイン期にマラカチテペック・モモシュコ (Malacachtepec Momoxco,あるいはMalacachtepec Momozco) という名前を持ち、そこではナワ人の或るグループの王国が栄えていた、というものである。そして、その王国を統治していたのは、ウエイトラウイランケ (Hueytlahuilánque) という人物であった。この郷土史には、ナワ系の民族がメキシコの古典史に登場する以前に文明を繁栄させていた、トルテカ人 (los tolteca)、チチメカ人 (los chichimeca) の名前も登場する。

また、トルテカから、チチメカを経て、マラカチテベック・モモシユコの小王国を設立したナワ人のグループにまで至る歴史的経緯が時間軸に沿って西暦で表現されている。また、ミルパアルタにかつてあったとされるナワ人の小王国の繁栄が終わる、アステカの首都のスペイン人による征服後、どのように当時の住民たちがスペイン人の支配とキリスト教という新たな信仰を受け入れ、その激変に適応していったのが述べられていく。(岸下 2015: 85)

ゴメスセサルによれば (Gomezcesar 2010: 95)、ビジャヌエバの描く歴史は信頼しうる出典にまったく依拠していない。ビジャヌエバは、「ドン・ガスパール・デ・スニガ (D. Gaspar de Zuñiga) 副王統治期の 1600 年、政府の書記官ドン・ファン・サンチェス (D. Juan Sánchez) によって記録された伝統」と「1529 年の古地図」という 2 つの出典を提示している。ガスパール・デ・スニガは、当時副王の地位にあった実在の人物であったが、ファン・サンチェスという人物の存在は不明である。そして、ビジャヌエバ自身その書記官を参照するための具体的情報を開示していない。2 つの出典自体についても、彼は詳細な情報を提示していないだけでなく、ビジャヌエバは、不思議なことに、彼と同時代の人々によるいかなる口承史についても言及していない。ミルパアルタのように 21 世紀に至ってもナワトル文化を保持している地域で、口承史を全く欠いた郷土史を当時著すことはきわめて不自然である。

結論として、ゴメスセサルはビジャヌエバによるミルパアルタの歴史をひとつの構築物と結論づける。第一に、「出典が広い範囲に及んでいるにもかかわらず、物語はそれらを位置づけることなしに、流れるように書かれていく」(ibid.: 102)。第二に、「作文法、句読法、注釈法、いくつかの単語、その他の形式面が、植民地期のスタイルに対応しておらず、もっとずっと現代的な形式に対

応している」(ibid.: 102) ののである。

彼の記述した歴史が、ゴメスセサルが指摘した通りの純粋な創作物であるならば、ビジャヌエバがパンフレット冒頭で、以下のように記したことの意味を容易に想像することができる。

ミルパアルタという土地も、先住民という人種 [raza aborígen] も国家の社会・経済的進歩にとっての障害ではない。そして、征服とは、先住民 [nativo] から奪ったり、彼に屈辱を与えたり、彼を剥奪状態にするためではなく、人々を類似させ有益にさせるためであったと理解されなければならないのだ。彼ら [スペイン人] には、先住民 [indígena] を差別するような権利はない。ミルパアルタの農民たちの改善とは、電力エネルギーの導入、学校に関心を持つこと、経済資源の産業化、ビジャ・ミルパアルタからサンパブロやサンタアナに通じる道路建設でもって可能になるのである。(ibid.: 90-91)

この郷土史家は、ミルパアルタにおける先住民の出自、征服された事実、そして同時代の近代化を、それらのいずれをも拒絶し、見て見ぬ振りをする事なく、丸ごと受容しながら未来を構想しようとしたのである。こうした先住民の過去をなかったことにし、後になって征服された事実を前にして途方にくれ、強迫観念に取り憑かれぬように。たとえ彼の先祖が文字を持たず、修道士たちも記録していなかったとしても、住民が共有すべき歴史は作り出されなければならない。誇りの源泉としての歴史は、将来、故郷で必要とされるであろう、と。

ちなみに、この裏付けを欠いた郷土史は、ミルパアルタの地元住民から歴史として広範に受容されている。この点は、Inafed という公的な政府機関のウェブサイトでビジャヌエバの記した歴史がそのまま引用されている事実にも表れている。

5. 〈私〉×地域×家族×「先住民」=? ——結びに代えて

私は2008年のフィールド調査を再考しながら、保守的な先住民イメージと生活様式の一般化の齟齬に直面し、「先住民」の同定で試行錯誤を始めた。その際、メキシコで先住民を研究する場合、少なくともミルパアルタのような場所は生活環境として私のよく知る日本社会とさほど変わらないのだと指摘した。民族はもはや生活様式の格差で定義できるようなものではないのである。

次に、中流化した地元住民のビセンテ一家、オアハカ州のサポテコを出自とし隣の村落で貧しい生活を送るイネスの家族、ケレタロ州のオトミーを出自とし貧しくも大学に進学する娘ブランカがいるエリカの家族という三つの事例を検討しながら、「先住民」の出自が階層との関わりで、どのように動態化するのかを確認した。ここで先住民的出自と階層移動の有無に目を向けることでわかったことは、個々人のアイデンティティはあくまでも個別的に成立するということだ。周囲が何と言おうと、個々人の努力や達成で、紋切り型の「先住民」から個人はいつでも離れていくことができる。どんな出自を持っていても、個別的には社会的な差別からは逃れうるのである。そして、逆にチャンスに恵まれなければどこまでも社会的な典型として生きていくことを余儀なくされる。

最後に検討したのは、ミルパアルタの歴史だった。過去という時間軸のなかに固定されている以上、歴史を変えることができない。すでに起きてしまったことなのである。この過去=歴史は社会の構造として機能し、かなりの程度、その過去=歴史の根付いた社会で生きる人々を縛る。だが、必ずしも歴史は静態的にあるわけではない。時には、ミルパアルタの事例では、歴史は未来に向けて作られる。それも歴史を単に否定するのではない。過去であることからくる歴史の構造としての機能をあくまで認めつつ、その作用の仕方を変えようとするのである。歴史は今=この人々に異

なる解釈が必要とされるのだ、と。

ここに至って、本試論の暫定的な結論を出したい。私はミルパアルタにやってきて、先行研究が1980年代、1990年代に描いていた現実とははるかに異なる現実に出会った。そこには民族としてすくい取ることのできるような一貫した現実はなかった。そこにあるのは雇用、教育、家族、祝祭組織、「伝統」の構成、情報技術の普及など個別的な状況だった。私は、博士論文でそれらを、自分自身の未熟ながらその時まで手に入れた知識から、地域×家族×先住民の式にして、その答えを記述しただけだ。そこに住む人々が過去と現在のはざままで民族の視点から彼ら自身を捉え直す不断の運動を抽出し、記述し続けること。それが、21世紀の民族研究なのである。

参考資料

(文献)

- 岸下卓史, 2015, 「先住民性」の多文脈化をめぐるミルパアルタ村落の民族誌——「伝統」と社会的帰属のローカリズム」(博士学位論文)立教大学大学院社会学研究科。
- 岸下卓史, 2010, 「ミルパルテンセの多義性に関する実証的研究——先住民性をめぐる葛藤についての一試論」『イベロアメリカ研究 XXXII 卷 第1号』上智大学イベロアメリカ研究所。
- ファープル, アンリ, 2002, 『インディヘニスモ——ラテンアメリカ先住民擁護運動の歴史』(染田秀藤[訳])白水社。
- フエンテス, カルロス, 1995, 『埋められた鏡——スペイン系アメリカの文化と歴史』(古賀林 幸[訳])中央公論社。
- ルイス, オスカー, 2003, 『貧困の文化——メキシコの〈五つの家族〉』(高山智博ほか[訳])ちくま学芸文庫。
- Gomezcésar Hernández, Iván., 2010, *Para que sepan los que aún no nacen: Construcción de la historia en Milpa Alta*, México, D.F.: UACM.
- Horcasitas, Fernando., 1968, *De Porfirio Díaz a Zapata: memoria náhuatl de Milpa Alta*, México, D.F.: Instituto de Investigaciones Históricas.

Pérez Zevallos, Juan Manuel., 2012. "Historia antigua y colonial de Milpa Alta", (Coordinadores) Barbosa Cruz etc., *Tohuhuettlanantzin: Antigua es nuestra querida tierra*, México, D.F.: Universidad Autónoma Metropolitana-Cuajimalpa.

(ウェブサイト)

Milpa Altaに関する各種・各時代別統計, INEGI: 2017年11月閲覧

(<http://www.beta.inegi.org.mx/app/areasgeograficas/?ag=09#>)

Milpa Alta, Historia, Inafed: 2017年11月閲覧

(<http://inafed.gob.mx/work/enciclopedia/EMM09DF/delegaciones/09009a.html>)

分野別就業状況, 総務省統計局, 2017年11月閲覧:

(<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/sokuhou/03.htm>)

下水道普及率, 国土交通省, 2017年11月閲覧:

(http://www.mlit.go.jp/report/press/mizukokudo13_hh_000352.html)

電気普及状況, 電気事業連合会, 2017年11月閲覧:

(<http://www.fepc.or.jp/enterprise/rekishitaishou/>)

家電普及率, 内閣府 主要耐久消費財等の普及率(2004年), 2017年11月閲覧:

(<http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html#chosakekka>)

中学生の高校進学率, 文部科学省

(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1368900.htm)